

こういう話である。サバトラしき夜の集会、糞尿、広場、滑稽きわまりない悪魔など、祝祭劇を構成する要素が登場してくる。糞尿や広場についてはこれまで述べてきた。最後の悪魔であるが、プッフアルマッコの変装した獣は、恐怖が骨抜きにされて、私たちにとってはぬいぐるみのような愛敬がある。悪魔の役割が確実に変化しているのである。

悪魔は中世聖史劇の末期より本来の恐怖感は失せて、失敗ばかりするどじまぬけな性格を与えられているという。つまり後世の道化の原型なのである。プッフアルマッコの悪魔は果たしてこの道化であり、シモーネ先生はまんまと道化に騙される。

医師という知識人が道化に恐怖し、嘲笑されて肥溜にぶち込まれる。身分の格下げであり、欲の皮の張った先三は、民衆のエネルギーな欲を暴くトリック（魔術）に見事にひっかかって面子を潰すのである。

ブルーノたちは、先生の欲心を道化の滑稽と糞尿のグロテスクさで一笑に付してしまう。そしてこれも（広場という）空間で演じられており、祝祭劇の世界を彷彿させる。

あべこべの地形学 —— 欲心魔術

二つの物語を読み解いていくうちに、いつのまにか劇的空間へと誘い込まれてしまった。この場を人知れず離れてあべこべの場へ移っているのである。そしてまったく別個の新鮮な視線で世界に向かっていている自分に気づく。それは改新でもあり、さらにそこは地形的にあべこべの世界でもある。

なぜなら、従来、民衆的な魔術は民衆の純粋な欲求（願望）を満足させてくれるものであった。しかし「デカメロン」の中では、しごく純粋なまぬけ人間の欲心を嘲笑う手段として魔術が人間の狡知によって利用される。騙される側の人物が本来的に欲心を露わにするからだろうが、それを笑い飛ばす痛快さが騙す方の人知に顕現している。このエネルギーは貴重である。

相手の欲心を逆手に取って上と下とをひっくり返す。中世のゴシック的な生真面目な世界からの脱皮である。「意識の祝祭化」とも言えようか。現存するものや既存のものを根源的に刷新する力、そして信念。きわめて具體的なこうした信念こそ、ルネサンス期の民衆の心底を貫いた思いではあるまいか。

それに魔術が使われた。これまでの三作品のほかに、水菜（九日目第三話）、護符（九日目第五話）が、あべこべの世界へと私たちを導く仕掛けとして用いられている。

自然探求という高尚な魔術ではもちろんないが、人間の欲心を痛快に擲論し、人間の性の惨めさや愚かさを肯定的に描き切っている。

ここにおいて魔術もようやくと地上に引き下ろされた。白魔術でも黒魔術でもない。人間の欲心を暴き出すレトリックとしての魔術、欲心魔術が民衆の底知れぬエネルギーとともに産声を上げたのである。

2 預言者カンパネッラ

異端の巨人

イタリヤ・ルネサンスはさまざまな天才を輩出したが、その最後を飾る巨人としては普通、ジョルダノ・ブルーノとトーマゾ・カンパネッラが著名である。

二人とも自らは敬虔なカトリック教徒だと主張しながらも異端者扱いを受けた。ブルーノはそのために火刑に処され、カンパネッラは二十七年間にも及ぶ獄中生活を余儀なくされた。

ブルーノとカンパネッラはともに攻撃的な性格の持ち主だったようだが、カンパネッラの方がより陰湿で猜疑な面が見られる。ネクラという表現がびったりするような気もするが、そういう性格の人の特徴の顕われか、彼は世界を自分に引き寄せすぎて見る傾向にあった。

彼は自らを預言者とみなして終末意識を濃厚に有していた。ここではカンパネッラの代表作である『太陽の都』を中心に、彼の終末観をなぞってみたいと思う。

革命によるユートピア

『太陽の都』(一六〇二年執筆。一六二三年出版)はユートピア小説として有名であるが、カンパネッラの考えるユートピアが終末論と背中合わせの関係にあることは銘記されるべきであろう。

というのも彼のユートピア思想の内実を彩る要素の中に、千年王国の思想があるからである。千年王国論とは、辞書的な解説になるが、全人類の終末(最後の審判)以前にキリストが蘇った聖人たちとともに地上に戻り、千年間続く栄光ある王国を統治する、という信仰をさす。千年王国の前の至福千年を意味しており、終末論の一端でもある。『ヨハネの黙示録』第二〇章にこれは語られている。

千年王国論を支える柱として、

①抑圧者と被抑圧者の位置が逆転するとき、歴史の極点として一つのユートピアの時代の到来が約束される。

②表面上堅固な権力と不正の砦を破壊しうる革命と救済者に関する示唆的な見通しがある。

この二つが挙げられる。

傍点を付したユートピアと革命は、ともにカンパネッラの思想を表現する上での基本用語でもある。南イタリアのカラブリア地方のステイロロという小さな村に生まれたカンパネッラは、北イタリア放浪の旅のあと、一五五八年故郷に戻ってきた。三十歳になっていた。

当時の南イタリアは、一五九九年のカトー・カンブレーの条約によってスペイン・ハプスブルグ家の属領となっていた。

また対抗宗教改革を推進しつつある教皇方の勢力も伸長してきており、スペインとも手を結んだ教会勢力は、異端審問で人びとを苦しめていた。

もともと南イタリアは北イタリアの食糧供給地という性格が濃く、十六世紀末にあってそれがさらに深刻化していた。被支配者層の生活に苛酷なまでの負担がかかり、彼らは山賊や追い剥ぎなどに転落して、一揆も頻発した。加えてペストの猖獗も一度ならず起こって、見るに耐えがたい状況を呈していた。

経済も困窮し、いつ反乱が起きても不思議ではない、一触即発の状況であった。貴族階級から排除された知識人もいて、彼らは経済的要素を超えた処に自らの夢を託した。それはアナキーな風潮を生み、革命の気運は成り立つつあった。

これら知識人はじめ貧困や失業に苦悶する一般の人たちは、自分たちを解放してくれるメシア的指導者を切実に求めはじめていた。

そういった状況の中へ舞い戻ってきた多感で行動的な青年カンパネッラにしてみれば、自分の活動の場を天から付与されたも同然だった。

一六〇〇年の世紀の変わり目には天変地異が生じると説いて、一五九九年の夏、カンパネッラは仲間と謀って、教会側とスペイン側の両方に対する反乱を企てた。海上からトルコ軍の支援を得て、カラブリア地方からスペイン勢力を駆逐し、腐敗した教会側を屈服させ、神権政治による共産主義社会を樹立しようとした。

しかし結末を先取りすれば、蜂起は事前に発覚し、カンパネッラは逮捕され、以後一六二六年までの二十七年間獄中生活を強いられることになる。『太陽の都』はこのときの革命の成功によって成立するはずであった理想都市国家を語ったものである。対話形式で綴られた小品で、蜂起後に計画していた神政共同体の青写真である。ルネサンス期のユートピア作品の中でもひとときわ特異な存在となっている。

精神再生のための手段

△太陽の都Vの支配者構造は、形而上学に相当する「太陽」を頂点に、その下に「権力(ポーン)」「知識(シン)」「愛(モル)」「の三者が並立する。

ポーンとはpotenza (力)から、シンとはsapienza (知)から、モルとはamore (愛)から派生している。

「太陽」となるためには、一等優れた形而上学者、神学者であり、あらゆる学芸、学問の基礎と証明、事物の異同と必然性、世界の運命と調和、万物に対する神の力と叡智と愛、万物の順位および天・地・海との関連について熟知していて、しかも預言と占星術についての造詣の深さが要求される。

どこか前近代的な呪術的なにおいのする支配者と言えよう。

蜂起発覚で逮捕されたからカンパネッラが陳述した「釈明書」には、一六〇〇年前後に洪水(一五九九年の聖通(復活祭の前の週)にステイロが洪水に襲われるとした)、地震、天体の合があり、諸権力を再構成するであろう宇宙的規模の刷新があつて、自分はこの預言に基づいて行動したと述べており、一五九九年ステイロに帰村したときに著した『世界の死の徴候』には、自分が組織しつつある反乱は、預言に従つて終末に先んじて世界統一を実現するもの、ということになつてゐる。

カンパネッラの蹶起の原因が、カラブリアにおける搾取者たる聖俗両界の権力打倒を目論んでいて、きわめて現実的な理由に基づいていたように傍目には見えるが、彼の内部では、占星術や預言による千年王国(至福千年)の思想が強く作用しており、むしろこちらの方にこそ立脚点があつたと思われる。

カンパネッラにあつては、政治的刷新は宗教的刷新と結び付いてゐた。いやむしろ政治的刷新は宗教的刷新を前提として成り立つものとされた。つまり新しい世界は精神の再生から生み出されるというわけである。

カンパネッラは、世界統一、世界改革というルネサンス的伝統を同じ南イタリア出身の隠者フィオーレのヨアキムの至福千年の思想に学んでゐる。

ヨアキムの思想は、歴史を「父の時代」「子の時代」「聖霊の時代」の三代に分け、三番目の聖霊の時代が一二六〇年より始まるとしたもので、聖霊の時代までには未曾有の苦難がキリスト教会を襲うが、天使のごとき新しい教皇とこれを助ける平和皇帝とともに待望の聖霊の時代に入る。そのときには国家権力も聖職秩序も教会財産も消滅し、ただ神と直面して瞑想にふける靈的修道士からなる靈的教会が存在するのみとなる。

このようなヨアキムの教会改革的預言は、フランシスコ会士に受け容れられ、一般の人びとにも深刻な感化を与えた。

カンパネッラは、この第三の聖霊の時代を一六〇〇年以降とみなしたわけで、未曾有の苦難の先駆けとして蜂起を計画した。したがって彼自身の意識としては、蜂起の首謀者というよりもむしろ預言者と言つた方が的を射ていたとも考えられる。

一五九九年の蜂起の時点で、反教会、反スペインの立場を明白にしたカンパネッラだが、『太陽の都』の中では、「真の法とはキリスト教の法で、濫用さえなければ、世界を支配する法となろう」と述べ、さらに「ほかならぬスペイン人たちが、全世界を一つの法のもとに統一する」と言及している。これは蜂起の動機と一見矛盾しているように思われるが、彼の二十代の政治論文を読むと次のようなことが判る。

四本あつて、「キリスト教の君主国」「教会の統治について」「イタリア君主論」「ネデルラント論」である。これらから導き出せる結論としては、キリスト教(カトリック)の頂点にある教皇が、なによりもすべての世俗君主を従えるべき存在のだが、軍事力を持たぬがゆえに、軍事力のあるスペイン王が実質的なまとめ役となつて、メシアの代わりとなるべきだといふものである。

つまり国際的レベルでの、教皇とスペインの支配は、結局カンパネッラのメシア思想とスペイン帝政論が合流した、カトリックの王による、精神的政治的世界統一の思想と言えよう。

地球を吸い込む太陽

△太陽の都Vの市民は天文学を研究している。市民たちは――

世界の構造を知ったり、世界は滅びるのか、滅びるとすればいつか、星は何でできているのか、星にはだれが住んでいるのかを知ったりするのは重要だということです。また、星や太陽や月がしめす前兆についてキリストが語った預言は正しいと信じています。これらの前兆は、愚かな連中にはほんとうとは思われていないが、しかしその連中の上に、泥棒が夜中に忍び込むように、世界の終末は確実にやってくるだろうということです。それで彼らは、この世界の革新、あるいはむしろ終末を待ち望んでいます。¹⁰⁵

ユートピアの住人が終末論を唱えているのに驚きも覚えようが、この背後に終末論の一環としての至福千年の理念があり、それがカンパネッラの思想的骨子であることを思い起こせば得心がいくであろう。

『占星術』という著書まである占星術の研究者であるカンパネッラは占星術的に、太陽が地球にしだいに接近してくることで至福千年が間近に迫っていると信じており、やがて愛の中心たる太陽が憎しみの中心たる地球を吸い込んでしまうと思っていた。彼は太陽を宇宙の中心に据えた。

『占星術』第七巻で彼は、自分の考える新宗教は太陽の動きによって生起したと述べ、キリスト教も含めて、あらゆる宗教の盛衰は占星学的に決定されるのが当然だとしている。

たとえば、宗教の中心が赤道近くに暮らしている人びとともにあつたとき、太陽は人びとを焼き焦がすことなく、人びとの精神を浄化するほど遠くに存在した。

しかし太陽が地球に接近するにつれて、人びとの精神は混濁し、宗教の中心は赤道地帯からエジプトに移った。そして同じようなことが繰り返されて、中心地はバビロニア、ユダヤ、ペルシア、ギリシア、ローマ、フランス、ドイツ、スペインと移り、いまや新世界にあるとする。

△太陽の都Vの市民も、太陽と星とを生あるもの、神のお姿、天の神殿として崇めている。

神への奉仕は太陽という象徴を通して行われる。というのも太陽は、光・熱・その他あらゆるものの本体である神の象徴であって、神の顔にはかならないからである。したがって太陽の中に神を考えて、太陽に向かって祈りを捧げるわけで、神の生きた家である星の中に住む善天使が、神と人間の仲介として働いてくれる。

これはキリスト教の唯一神に太陽を介在させるもので、きわめて異端的魔術的である。さらにカンパネッラはこの太陽の中に物質の原理を見出している。

彼ら（△太陽の都Vの市民）は二つの自然学原理を考えられています。父なる太陽と母なる大地です。またその説によれば、大気は天の不純な部分であり、そして火は太陽から生じ、海は太陽によって液化した大地の汗で、血液が精神を人体と結びつけるように海は大気と大地とを結びつけます。世界は巨大な生きもので、その体内にわれわれ人間は、われわれの体内にやどる寄生虫のように生きています。¹⁰⁶

これは太陽中心の思想を示しており、カンパネッラがヘルメス思想の影響を強く受けていることが理解できよう。

いやむしろ『太陽の都』はヘルメス思想をキリスト教という枠組を借りて表現した作品とみなしてもよいと思われる。

首長は「太陽」と呼ばれる聖職者である。その「太陽」は、生命力あふれる明るさ――というよりは、「太陽たる首長」を中心とした都の意味で用いられている。

太陽である僧——それはもちろん、ヘルメスの僧である。彼が占星術、錬金術、秘密的知識まで精通していることは明らかである。

カンパネッラにとって『太陽の都』は、スペイン支配によるイタリアの解放という政治的要因に端を発しながらも、また社会の思想や理念や体制の根本的変換、革命にそのモチーフがあったとはいえ、この変換や革命後のヘルメスの有機性に救済の意味がこめられていた。

『太陽の都』は終末に向けて書かれたユートピアであるが、そこには至福千年の思想を背景とした精神の救済の意味が潜んでおり、しかもそれが異教的なヘルメス思想を軸に展開されたのであった。¹¹⁰

3 カンパネッラの空間性

性愛の匂い

『太陽の都』を読んで私が第一に感じたのは、思想的範疇を越えた性愛の濃密な匂いである。『太陽の都』の文体は端正で、生殖行為の概念的な描写もなんら淫靡な趣はないのだが、そうやって、いわば白紙のように性が扱われれば扱われるほど、それだけエロチックに感ぜられ、樹液の滑りにも似たエロスが漂ってくる。

カンパネッラの七十一年の生涯のうち都合二十九年間も異端的思想の持ち主として牢獄生活を送った事実も影を落としているのかもしれない。青年期、壮年期と、三十年近い歳月、彼は己の性をどう処理したのであろうか。たとえ彼がドメニコ会の修道士だったとしても——。理想都市での統制された性行為を知るゆえになおさらなのだが、作品中のストイックな説明の陰に、どろどろした性的衝動を感得せずにはいられない。

牢獄生活を体験した人物によって書かれたこの作品は、前田愛もその著『都市空間のなかの文学』（筑摩書房、一九八二）で論じているように、獄舎のアナロジ—としてのユートピア文学であるという。

ユートピア文学が、閉ざされた空間、組織化された空間のなかで、人間の幸福を実現しようとする熾烈な夢想の産物であるとすれば、それはもっと深い意味で、牢獄という権力の装置とアナロジイの関係をもつことになるだろう。牢獄もユートピアもへ都市Vを母胎としてうみおとされた亜種にちがいないからである。

（前田愛『都市空間のなかの文学』）

この見解には首肯できるが、『太陽の都』を成り立たせているのは、こうした機能的なアナロジ—であるよりも、性愛の問題を生殖にのみ直結させてストイックに統制してしまう、カンパネッラ自身の内奥に潜む、抑圧の裏面としての禁欲ではないかと考えられる。つまりねじれたアナロジ—である。

女子は十九歳に達するまでは男子と同衾せず、男子は二十一歳までは生殖行為につけません。……

彼らは男子も女子も古代ギリシア人のように全裸で運動しますので、教師たちは誰が性的不能者であるとか性交に適さないとか、どの体が誰の体と適しているかなどを知ります。彼らはよく体を洗ってから、三晩ごとに交わります。……

彼らは大体において友情より生まれる愛しか知らず激しい性愛にかられた愛などは知りません。¹¹¹

宗教的ともいえる一定の理念に支配された禁欲的な性の営みであるが、生殖一点（優秀な子孫を産み出すこと）にその目的がある以上、背景には結合を希求する思念が顕在すると思われる。生命の尊重と維持であって、カンパネッラの言葉を借りればへ全体の生命Vの醸成と言えようか。

生命的存在が生き生きと活動しうる状態の都市、それが太陽の都の核心にある理念だと推察される（カンパネ